

地域社会の変化と環境保護の関わり

～ 石垣島・白保集落サンゴ礁資源の関わりの事例から ～

高木 香奈子

キーワード：サンゴ礁，白保の海，コモンズ，「よそ者」，WWF ジャパンサンゴ礁保護研究センター

1. 研究の目的

サンゴ礁という特殊な環境は，豊かな自然と人々の文化を育んできた。石垣島・白保の人々は，世界的に貴重なサンゴ礁のある海のサンゴ礁資源をうまく利用した生活を営み，文化を発展させてきた。白保の海の資源は，私有でも公有でもなく，白保住民の共有財産として住民に利用されながら，その環境は維持されてきた。1979年，白保の海に新石垣空港を建設するという計画が持ち上がった際には，イノーを利用していただ住民たちによって，海を守るための反対運動が展開された。現在，白保の海は，農地からの赤土流出に伴う海の赤土汚染やサンゴ礁資源の枯渇や漁やシュノーケリングによるサンゴの破壊など様々な問題を抱えている。なぜこのような問題が生じてきたのか，を問う。さらに，これらの問題を解決するための糸口を考察する。

2. 白保の海とは

白保の海は，以前は，農人（ハルサー）を中心とする住民全体によって，日常生活の中で，礁池（イノー）の海藻，貝類の採集，カチによる魚類の捕獲等，サンゴ礁資源が利用されていた。その結果として，住民は海に対する感謝の気持ちをもっていた。現在は，ハルサーによる利用は，ほとんど見られなくなっており，代わりに石垣島内に住む海人（ウミンチュ）やごく一部の白保住民による利用に限られている。白保の人々が生活の中で海に接する機会は，生活の変化とともに減っている。人々と海のかかわりが薄くなったことによって，人々の海に対する気持ちは変化している。白保の海は，人々の生活と結びつくことで，人々の意識の形成に影響を与え，コモンズが生れることによって海が維持されていたと考えられる。白保におけるコモンズは，海と人々の生活のかかわりが軸となっている。これらを明らかにするためにアンケート調査を行った。

3. 「白保住民と海とのかかわりに関するアンケート」調査

海をほとんど利用しなくなった現在の白保住民と海との関わりを知るために，2004年4月から6月にかけて小学生から70歳代までの白保住民209人を対象として，39項目にわたるアンケート調査を行なった。その結果から，白保の海の資源を利用した経験がある人ほど白保の海を誇り思う気持ちを持っていることが分かった。また，子ども達のサンゴ礁資源の利用は，WWF ジャパン（世界自然保護基金ジャパン）のサンゴ礁保護研究センターの行なう体験学習によるものが中心であることが分かった。海を誇りに思うことは海をきれいにしたいと思うことにもつながっている。海を利用し，海に触れることと人々の海に対する気持ちは密接な関係があるといえる。

4. 白保における環境保護の今後

白保の海を守るためには，住民が海に触れる機会を持ち，コモンズを再生させることが必要であると考えられる。日常生活で海に触れることがなくなった今，その機会を住民に提供する役割を担うのが「よそ者」である。白保には，WWF ジャパンのサンゴ礁保護研究センターがあり，日常生活では知ることができない白保の海に関する科学的な情報を提供したり，体験学習という形で海と接する機会を提供することができる。また，伝統文化等の保存や継承の手助けとなる活動も行なっている。白保住民だけでは解決困難な様々な問題を抱える白保の海を守るために，白保住民だけでなく，「よそ者」と呼ばれる人々と協力することによって活動していくことが必要であると考えられる。